

赤い鳥を訪ねて

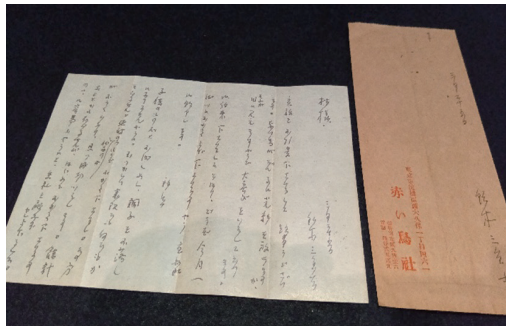
鈴木潤吉

昨年後半には、『赤い鳥』に多くの童話を寄稿した豊島与志雄の故郷・福岡県朝倉市や北九州文学館のほか、いくつかの企画展を巡ってきました。

北九州文学館には林美美子宛ての三重吉書簡が所蔵されていて、特別に閲覧させていただきました。三重吉の他界数か月前に書かれた三通の書簡で、『赤い鳥』への寄稿の依頼と原稿を催促する内容です。その中で、「どなたかご婦人の方で、児童の讀物の中心になって下さる方が、日本におありになっていゝと思ひますのですが、文壇の方で只今、少年少女のためにおかきになつてゐるお方へはお頼み申したくもございませぬ」とうまく誘っていますが、三重吉の本音が出ている文だと思いました。当時、大衆性の濃い女学生向けの少女小説が人気を博していましたが、児童向けの文学としての『赤い鳥』を目指す人材が乏しかったのではないかと想像します。当然三重吉は美美子の才能を認めた上で、彼女の小説と同様の質の高い童話を林は書けると確信したのでしょう。結果的に『蛙』が7月号に掲載されました。三重吉が長生きしていれば、野上弥生子とともに林も『赤い鳥』の看板女流作家になっていたかもしれません。

ところで、三重吉の追求した『赤い鳥』の童話とは何だったのか？ 今回、その一つのヒントに出会いました。豊島与志雄の童話を収めた『卵の夢』（赤い鳥社発行、昭和二年）の序文で豊島は「童話の世界」とは「私達が目に見たり耳に聞いたりする物事の、その一つ向ふの奥深いそして晴々としたそして不思議な、何とも云へない或る世界です」と述べています。三

重吉もこの童話を共有していたはずで、三重吉のいう芸術的文章や綴方はある意味そこへといざなう取り組みであつたのだと思います。



「赤い鳥の合唱曲」紹介

童謡愛好グループ

主宰 高田幸子

砂山

北原白秋が新潟で開催された童謡音楽会に招待され、地元の小学生から歓待された。白秋はお礼として新潟を背景とした歌を作ることと約束しました。その時の歌です。モデルの地は寄居浜です。そして雑誌「小学女生」に大正十一年九月号に発表されました。

アメフリ

北原白秋が小田原に住んでいた時、ご長男の隆太郎さんが幼稚園に通っていました。その情景です。一番の歌詞の「おむかい」は東京・神奈川地方の方言です。

二番にある「鐘」は今でも幼稚園にあります。

♪「砂山」

作詞 北原白秋
作曲 中山晋平

一、海は荒海 向こうは佐渡よ
すずめ鳴け鳴け もう日は暮れた
みんな呼べ呼べ お星さま出たぞ

二、暮れりや砂山 潮鳴りばかり
すずめちりぢり また風荒れる
みんなちりぢり もう誰も見えぬ

三、帰る帰るよ 葉裏原分けて
すずめさよなら さよならあした
海よさよなら さよならあした

♪「アメフリ」

作詞 北原白秋
作曲 中山晋平

一、あめあめ ふれふれ かあさんが
蛇の目でおむかい うれしいな
ピッチピッチ チャップチャップ
ラン ラン ラン

二、かけましょ かばんを かあさんの
あとから ゆこゆこ 鐘が鳴る
ピッチピッチ チャップチャップ
ラン ラン ラン

三、あらあら あの子は ずぶ濡れだ
やなぎの 根方で 泣いている
ピッチピッチ チャップチャップ
ラン ラン ラン

四、かあさん ぼくのを 貸しましょか
きみきみ この傘 さしたまえ
ピッチピッチ チャップチャップ
ラン ラン ラン

五、ぼくなら いいんだ かあさんの
大きな 蛇の目に 入って
ピッチピッチ チャップチャップ
ラン ラン ラン

「ゴドモノクニ」

大正十四年十一月号

「赤い鳥の会」活動状況

◇令和六年

3月20日 鈴木三重吉童話集 発行
4月13日 編集会議
6月1日 『赤い鳥会報』第2号 発行
6月22日 鈴木三重吉忌講演会

「鈴木三重吉と坪田譲治
『赤い鳥』の原稿添削を
めぐって」

ノートルダム清心女子大学
文学部日本語日本文学科 教授
山根知子先生講演

三重吉忌法要

◇令和七年
2月15日 理事会
3月5日 広島市立中央図書館より
「鈴木三重吉童話集」
100部を当会へ寄贈



「鈴木三重吉 赤い鳥の会」 会員募集

会費は年間 2000 円です。

●お問い合わせ
〒730-0051
広島市中区大手町 3-10-6
長遠寺内
鈴木三重吉赤い鳥の会
電話 082-247-0056

●郵便振替
口座記号: 01370-4
口座番号: 59414
口座名: 鈴木三重吉
「赤い鳥」の会

鈴木三重吉『赤い鳥会報』
第3号
編集発行人 鈴木三重吉「赤い鳥の会」
会長 長崎 龍深
制作／印刷 クリエイティブアーツウエノブ
ウェブサイト http://akaitori.jp.np.org/
2025年6月1日 発行

鈴木三重吉忌法要（2024）報告 p1
下岸大助教諭寄稿 p2
出雲俊江教授寄稿 p3
鈴木三重吉忌講演を聴講して p4
鈴木潤吉氏寄稿 p4
高田幸子氏寄稿 p4
赤い鳥の会活動報告 p4



赤い鳥
会報

題字 鈴木 すず

鈴木三重吉忌法要

2024（令和6）年6月22日 長遠寺



▲三重吉忌法要、本堂



▲法要・講演会会場



▲中央図書館様 挨拶



▲鈴木潤吉氏 挨拶



▲本堂 法要

法要後に行われた講演会



児童朗読

「人間はくもの糸を
のぼれない」

広島大学附属
三原小学校 3年

田村 真理嘉 さん



鈴木三重吉忌講演

鈴木三重吉と坪田譲治
～『赤い鳥』の原稿添削をめぐって～

ノートルダム清心女子大学
文学部 日本語日本文学科 教授

山根 知子 先生

二〇二四（令和六年）六月二十二日（土）雨。足元の悪い中、多くの方が第八十九回三重吉忌法要に参列されました。鈴木家からは鈴木すずの長女留美子様とご家族、鈴木珊吉の次男潤吉様とご家族の姿も。潤吉様からは挨拶の中で小説家野上弥生子に触れ、実家大分県臼杵市には三重吉の直筆の書が大切に保管されているお話を頂きました。

中国新聞社主催の第76回鈴木三重吉賞作文の部特選に選ばれた田村真理嘉さんの「人間はくもの糸をのぼれない」をご本人の朗読で聞きました。「自分にとって大切かどうかで人間にとっての実際の命の重さは変わっています」。誰もが一度は通る疑問を、素直な気持ちで書かれ、共感の気持ちで拝聴いたしました。

童謡愛好グループ主宰の高田幸子先生指揮で歌った「赤い鳥小鳥」「雨」で和んだ空気の中、講演が始まりました。

ノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科教授山根知子先生による丁寧なお話で、三重吉の譲治に対する児童文学作家として育てようとする心の動きまで感じることができました。

『赤い鳥』原稿紹介 ③

広島県立広島高等学校 教諭 下岸 大助

「蜘蛛の糸」 (広島市中央図書館 複製原稿)

1 『赤い鳥』前夜ー芥川龍之介「蜘蛛の糸」執筆まで
『赤い鳥』と聞いて、まず思い浮かべるのは何でしょうか。童話、新美南吉「こんぎつね」、有島武郎「一房の葡萄」、それとも童謡「かなりや」や「ゆりかこの歌」でしょうか。大正七年七月に創刊され、昭和十一年十一月まで続いた『赤い鳥』は数多くの名作を生んでいます。様々な名作が生まれた『赤い鳥』ですが、その中でも芥川龍之介「蜘蛛の糸」は本雑誌を代表する〈顔〉と言つて差し支えないでしょう。今回は、この誰もが知る芥川龍之介「蜘蛛の糸」の執筆の舞台裏に迫ろうと思います。

『赤い鳥』創刊にあたって、三重吉は気概と不安が入り混じる感情だったと思います。と言いますのも、三重吉は当時、小説家として、ある程度の地位を築いていました。そんな三重吉が、わざわざ小説家の筆を折り、新たに「児童文学」の世界に入っていくのですから、失敗は許されません。と同時に自身が築いてきた人脈を使い児童雑誌を作れば、必ずや成功するという勝算もあったと思います。とにもかくにも三重吉は『赤い鳥』創刊にあたり自身が築いてきた人脈をフルに使いました。その一人が芥川龍之介であり、そこで生み出された作品が「蜘蛛の糸」だったのです。

2 「蜘蛛の糸」のゆくえー芥川龍之介から三重吉へ

創刊号の執筆に芥川龍之介を指名した理由は、一つには同じ漱石門下(木曜会メンバー)という繋がりがあったこと、そしてもう一つは芥川龍之介の知名度によるところが大きいでしょう。ただし、そんな新進作家、芥川龍之介も童話など

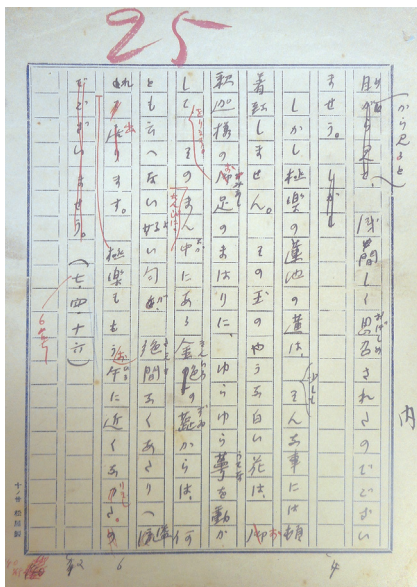
は書いたことがない。どうしようかと悩み、悩みながら「蜘蛛の糸」を執筆しようです。それでも、さすがは芥川龍之介です。『赤い鳥』の編集助手をしていた小島政二郎は「蜘蛛の糸」原稿を三重吉の所へ届けた時の様子を次のように描いています。

芥川が世間で持てはやされるのは当たり前だ。まるで外の奴等とはモノがちがふ。「赤い鳥」はじまって以来、こんな傑作を書いたやつは一人もいない。しかし、文章だけについていへば、まだ子どものための文章に馴れていないところがある。そこを指摘してやるからよく見ていたまへ。

いつの間にか三重吉の論理は都合よく私のためと云ふことになつて『蜘蛛の糸』に赤インキのペンを入れはじめた。

(小島政二郎「颱風の目のやうな」)

「蜘蛛の糸」が名作だと三重吉は見抜いた。こちらこそさすがは三重吉です。そこまでは良いですが…さあさあ、ここから大変なことになった。芥川の承諾などはよそに三重吉はどんな「蜘蛛の糸」を手直ししていくのです。赤インクでの手直しは一所、二か所…いえない、原稿を見ると、なんと七十五か所もの修正が入っています。一つ、結末部分を取りあげて手直しを見てみましょう。次の『赤い鳥』掲載の文章と実際の原稿【図1】と比較してどこが変わっているか見比べてください。(皆さんはどちらがお好きですか?)



【図1】 実際の原稿「蜘蛛の糸」

しかし、極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のやうな白い花は、お釈迦さまのおみ足のまはりに、ゆらゆら萼を動かしてをります。そのたんびに、まん中にある金色の蕊からは、何とも云へないよい匂が絶間なくあたりへ溢れ出ます。極楽ももうお午に近くなりました。

『赤い鳥』

「今日鈴木さんの御伽噺の雑誌を見ました。どれをよんでも私のよりうまいやうな気がします。皆私より年をとつてゐて小供があるからそれで小供の心もちがうまくのみこめてゐるのだらうと思ひます」

(六月十八日)

「鈴木さんのは仮名と漢字の使い方ばかりではなくすべてがうまいやうです。とてもあは行きません」

(六月二十三日)

ここから推測できるのは、おそらく芥川は三重吉の手直しを「良し」としていただろうということです。童話執筆に慣れている三重吉『赤い鳥』創刊以前に童話の翻訳をしています。)に自身の作を委ねるのは当然と言へば、当然のことです。

私たちはついつい、一つの作品には一人の作者がいると思ひ込んでしまします。つまり、「蜘蛛の糸」は芥川龍之介が生み出した作品だと。しかし、実際には芥川から三重吉へ原稿が渡り、『赤い鳥』に発表されるなかで、少しずつ形を変えており、そういう意味では三重吉も「蜘蛛の糸」の作者の一人なのかもしれません。また芥川自身も「蜘蛛の糸」を一から生み出したわけではなく、典拠があり、それを基に創作をしています。そうした作品の背景に目を向け「蜘蛛の糸」を捉えなおすとき、「蜘蛛の糸」は、まさに多様な糸が複雑に絡み合った織物(テキスト)であると言えるでしょう。

『赤い鳥』作品ピックアップ その4

広島女学院大学教授 出雲 俊江

小山内薫 「梨の實」

連載第4回、第一巻第四号(大正7(一九一八)年10月号)のピックアップは、小山内薫「梨の實」をとりあげたいと思います。

「梨の實」は『赤い鳥』収録童話作品の中でも傑作として知られる作品です。

お話は、幼い頃に天神様のお祭りで見た不思議な手品のお話として語り出されます。大江山の鬼でも何でも出してやるというお爺さんに、見物人が「梨の實」を出せと言う。冬には梨の実はありません。お爺さんは天国の庭から盗んで来させると言つて、孫に中空にかかる綱を登つて行かせます。目の前で大仕掛けな手品を見せられているような内容の奇想天外さ、鮮やかな場面展開。大胆でテンポよく、惹きつけられて一気に読み終わります。

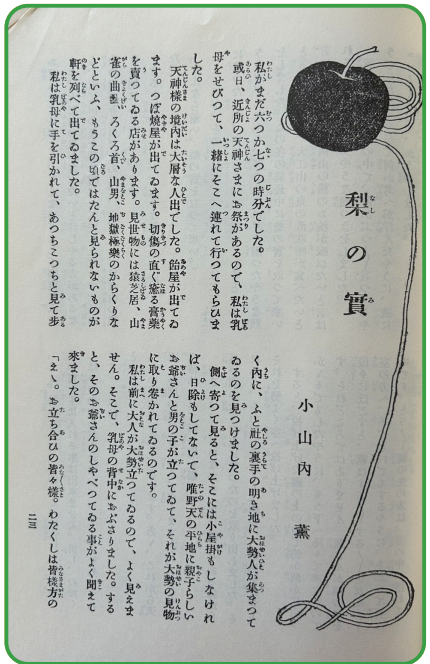
作者の小山内薫(一八八一(明治14)一九二八(昭和3))は広島県生まれの作家、演出家です。

『赤い鳥』創刊時の賛同作家としても名を連ね、『赤い鳥』初期には小山内薫作の童話作品が継続的に掲載されています。

小山内薫は、イブセン「人形の家」の上演、築地小劇場の設立など、新劇運動の基礎を築きました。



『赤い鳥』第四号
十月号表紙



『赤い鳥』第四号に掲載された
「梨の實」23頁



『赤い鳥』第四号に掲載された
「梨の實」25頁

鈴木三重吉忌講演を聴講して

「鈴木三重吉と坪田譲治」 『赤い鳥』の原稿添削をめぐる

『赤い鳥』童話の発表は、譲治の置かれた状況や三重吉との関係から、前期と後期に分けられます。前期は、昭和二年から昭和八年七月。その間の譲治の生活は、岡山の実家の工場経営をして、文筆以外の収入がありました。創作には専念できないことから、『赤い鳥』にも数ヶ月おきにしか童話を発表していません。後期に入ると、昭和八年七月に岡山の家業の工場の株主総会にて譲治は取締役役を落とされ、東京で文筆のみによって妻と子供三人との生活を支えなければならなくなりました。

三重吉は譲治の前期の原稿には加筆添削もなく、『赤い鳥』でめざしていた作品世界を譲治作品に見出したと好評価を示しています。しかし、後期に入ると、大添削をします。三重吉の手入れ原稿は、譲治に手紙に同封して返却されていたようです。

譲治は後期の生活を、「ペンで生活できないような状態」とし、三重吉を「頼みとしていた」と述べています。三重吉は全文を書き直すような大添削を行ったときでも、執筆者名としては坪田譲治の名を出し、さらに譲治に原稿料を払っていることも書簡からわかります。

二人のやりとりについて知る『赤い鳥』の画家深沢省三は、譲治の童話が、『赤い鳥』になくってはならないものであったことを証言すると同時に、三重吉の文章指導の厳しさのため、譲治が相当のつらさを感じていたことを身近な立場から伝えています。

譲治の童話への素質を見出した三重吉の心と、それに応えた譲治の心は、講演を最後まで聞いて、三重吉の通夜の席で呟く「これでもう私を叱って下さる人が遂に一人もなくなりました。」という寄せ書きに書いた一言に集約されているように感じました。